

---

# 夢色彩のカーバンクル

倉元裕紀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夢色彩のカーバンクル

### 【Nコード】

N6452Y

### 【作者名】

倉元裕紀

### 【あらすじ】

前世の記憶。それは夢を通して伝えられる、過去の自分からの贈り物。世代を超えて伝えられる、忠告、運命、そして思い出。世界中の人々が必ず見るその記憶を、レオンはなぜか見られずにいた。そこで彼は冒険者になることを決意する。自分の魂を象る遺産、その場所を示すと言われている導きの妖精、カーバンクルに出会うために。世代を重ねる人間たちと、不死の存在であるカーバンクルが共存する世界。その中で成長していくレオンの物語。

## 雪解けの道

まだ雪が残っているからなのか、荷馬車越しに伝わってくる振動も控えめだ。まるで今日の日の僕の為に、雪を残しておいてくれたみたいに。春が雪解けを先延ばしにしてくれていたのだろうか。きつと、明日からは本格的な春。

自然と顔が綻ぶ。

もつとも、村を出る時から、ずっと緩みっぱなしだったけれど。澄んだ心地いい空気。

何かの果物を干した物だろうか。甘い匂いが漂ってくる。

何より、抑えきれない期待。

レオンは馬車の外に目を向ける。

抜けるような青空。雲一つない、まさに快晴。

本当にいい日だ。

神様と、そしてイブ様に感謝しないと。

「おーい。坊主」

荷馬車の御者の声。まだ若い男性だ。たまに村までやってくる行商の人らしい。今日までほとんど面識はなかったが、レオンの旅立ちの事を聞いて、ついだからいいよと快く馬車に乗せてくれた、優しい人だ。

レオンは馬車の中から顔だけ出して聞いた。

「何ですか？」

御者の男性は、手綱を握ったまま、ちらりとだけこちらを見る。

口元が少しあがっていた。

「見えるだろ？」

彼の言葉の意味がすぐには飲み込めなかった。だけど、彼と同じように前を向いてみると、すぐに分かった。

山を下りた先。まだ遠いその先には、見渡す限りの平原が広がっている。

そして、その広大な土地にぼつりと、だが確かに町が見えた。

自治都市ユースアイ。

「うわぁ・・・！」

目を輝かせるレオンを見て、御者は少し苦笑したようだ。

「ちっさい町だよなぁ」

「小さいんですか？」

きよとんとした顔で聞くと、今度は声を出して笑われた。それがどうしてなのか分からなかったので、レオンはますます首を捻った。「小さい小さい。まだ出来て400年くらいだし、それに、交通の要所ってわけでもないから、あんまり大きくならないんだよなぁ」  
「へえ・・・」

「でも、住んでるのはいい奴ばかりだから、坊主みたいな田舎者にはちょうどいいな。せいぜい腕を磨いて、名のある冒険者になってくれよ。出来たら、サイレントワールドくらいの」  
レオンは照れて頭を掻く。

「いや、そこまでは、ちよつと・・・」

「そうか？じゃあ、俺のお得意様になつてくれればいいや」

男はそこでまた笑った。やっぱり理由は分からなかったが、レオンもつられて笑った。

ひとしきり笑ったところで、御者がまた一瞬だけこちらを見た。

「というか、坊主。お前、ジーニアス？」

ジーニアスとは魔法が使える冒険者の総称だ。つまり、彼の質問の意味は、貴方は魔法が使えますかという事である。

「いえ、魔法は全然」

「でも、サイレントワールドの故郷だよな？お前の村」

「あ、はい。でも、僕は全く才能がないみたいで。一応調べて貰おうと思っているんですけど、たぶん魔法はダメですね。だから、アスリート志望で頑張ってみようかと」

アスリートとはジーニアスの反対。つまり魔法が使えない冒険者の事。冒険者を大別すると、このどちらかになる。アスリートの方は、剣とか弓とか、体力勝負の冒険者が多い。

「それは苦勞しそうだな。お前はあんまり身体が大きくないし……っというか、明らかに弱そうだなあ。俺の方が強いんじゃないか？」

酷い言われようだが、まったく異論はなかった。レオン自身も、それは自覚している。

実際、レオンは村の中でも、あまり腕っ節が強いとは言えなかった。身長は普通くらい。身体もあまり遅いとは言えない。幼い頃は、よく女の子と間違えられたほどで、きつと、母親に似たのだからとよく言われる。黒い髪と濃い瞳はまさに母親ゆずりである。だが、母親には魔法の才能が少しだけあったのに、それはレオンにはさっぱり遺伝しなかった。

多少残念ではあるが、レオンはあまり気にしていない。父親も母親も、レオンの旅立ちを応援してくれた。優しい両親だから、それだけで十分だ。

レオンは苦笑しながら言った。

「そうですね。一応はいろいろ訓練してみたんですけど」

「なんかさ。一年くらいたったら、あそこの雑貨屋か何かで働いてる気がする」

「そんな事は……ないとは言いきれないですね」

もしダンジョンで大怪我でもしたら、そうなっているかもしれない。いい。

その返答に、御者の男は少し口元をあげる。

「謙虚だねえ。まあ、身体が小さいアスリートでも、伝説になった奴はいるんだ。スニークとかはいい例だよな。お前も大方、その辺りを目指してるんだろ？」

その質問はレオンには答えにくいものだった。

普通はそこで、はいとかいいえとか、はっきり答えられるのだ。

冒険者を志す人達は、みんな確固たる目標というか、指針がある。サイレントワールドとかスニークというのは、冒険者として伝説になった人達に与えられた称号で、今を生きる冒険者達の目標でもある。だが、彼らの名前には、それ以上の意味もある。

仕方なく、レオンは正直に答える事にした。

「いえ、その・・・なんていうか、僕は分からないんです」

「へ？」

男が驚いた表情でこちらを見る。予想していた通りの反応だった。そんなに驚かせて申し訳ないという気持ちだが、レオンの心の中で急速に膨らんだ。

若干焦りながらも、慎重に言葉を選んで説明する。

「そのですね・・・実は全く前世の記憶がないんです。イブ様どころか、夢自体も全く見た事がなくて。だから、冒険者になったら分かるんじゃないかと思って、決心したんです。もし一人前の冒険者になれたら、アーツを手に入れられたら、前世が分かるんじゃないかって」

これで分かって貰えるだろうかと不安になりながら、レオンは御者の男の顔を見つめる。

その男は目を見開いたまま固まっていた。彼のこんな顔を見るのは初めてだ。村を経つてからまだ一日半ほどの付き合いだが、いつも気さくで余裕のある男。まだ若く見えるが、自分よりは明らかに年上だし、自分が彼の年齢になった時、彼くらい落ち着きある大人になれているとは思えない。そんな男が、思考停止するほどの事実なのだ。頭では分かっていたものの、目の当たりにしてみると、自分でも意外なくらいだった。

「・・・やっぱり変ですか？」

おずおずと聞くと、男はやっと我に返ったようだった。

「あ、いや・・・まあ、そうだな。少なくとも、そんな奴は初めて聞いた」

「初めてですか？やっぱり珍しいんですかね」

「珍しいってどうか・・・そんな奴がいるとは思わなかった」

レオンはそこで、かねてからの懸念を相談してみる事にした。

「これ・・・ギルドに話しても、受け入れて貰えると思いますか？」  
男は難しい顔をしながら前を向いた。

レオンにしてみれば、前世が見えないというのが、冒険者を志す最大の動機でもあり、また、最大の懸念でもあった。自分には見えないその前世というものを、多くの冒険者は自分の指針にする。前世が剣士ならば剣士の道を、魔術師なら魔術師の道を志すものなのだ。それが最も自分に適した道で、何より、前世の記憶がその楽しさを教えてくれる。

その指針がない自分は、いわば真つ暗闇にいる状態。これがどれくらいのハンデなのか、自分では分からないのだが、不安は不安だった。

黙ったまましばらく考えていたが、やがて唐突に口を開いた。

「俺さ。今は見ての通りの商売人だけど、夢の中では料理人なんだよ」

突然の話題に、レオンは反応が出来なかった。

「料理人っていつても、俺に見えるのは見習いの時の記憶だけなんだけどさ。しかも、そんなに大きくないレストランなんだ。だから、まあ、そんなに腕がいいわけじゃなかったんだろうな。だけど、料理に魅せられているのは、もの凄く伝わってくるわけ。見習いだから、自分の好きな料理なんか作らせて貰えないんだけどさ。でも、それでも楽しかったんだ。食材を前にした時の高揚感だけは変わらない。今だって、料理人じゃないけど、料理は好きなんだ。昨日の煮込み料理も旨かっただろ？」

レオンは頷く。確かに素人の料理ではなかったが、行商だから料理も自然に身についたのだろうと思いきんでいた。

「そんな俺でも、今は料理人じゃなくて行商をやってる。もちろん、食材をみる時には役に立つ事もあるけど、せいぜいそんな程度。だから、まあ、前世なんてその程度だと思えばいいんじゃないか？ギ

ルドの方も、まあ困るかもしれないけど、みんながみんな、前世と同じ道を選ぶってわけじゃないと思うし・・・ユースアイのギルドは小さいところだから、いきなり追い返したりはしないと思うな。もつと大都市だと、大勢いて忙しいから、坊主みたいな初心者には手にされないかもしれないけど」

「そうですか・・・」

レオンは少し考え込む。

そこで男が可笑しそうに言った。

「今から戻ってというのはお断りだからな」

慌ててレオンは首を振る。

「いえ！全然。あの、話して貰ってありがとうございます」

「あんな話でよければいつでも。しかし・・・前世の記憶がないから冒険者になりたいっていうのも、結構な話だよなあ」

「やっぱり変ですよね」

「だなあ。でも、もしかしたら、お前、凄い奴なんじゃないか？」

突然の言葉に、レオンは戸惑う。

「え・・・何ですか？」

「だって、前世がないなんて奴、相当なレアなわけだ。もしかしたら、お前1人かもしれない。実は、凄い秘密があるとか、そういう事かもしれないだろ？」

「いや、秘密って言われても」

「もしかしたら、歴史に名を残すんじゃないか？サイレントコールドみたいに」

「だから僕、魔法使えませんって」

「じゃあ、スニークみたいに」

「僕の事、弱そうだって言ってたじゃないですか」

「いや、失敗したなあ。そんな大物だとは思わなかったから」

「あの、人の話を・・・」

「俺、伝説の男の旅立ちを案内した男になったわけか。どうせなら、もう少し為になる話をしとくんだったなあ。いや、今でも遅くない



か。そうか。そうだよな。よし、じゃあ、とりあえず、俺の女性遍歴をざっと・・・」

全く為にならない予感しかしなかった。

「いや、それはちよつと・・・」

「そうか？ 確実に為になると思うけど。お前だって、これから何人もの女性を泣かせることになるわけだし」

「勝手に変な予定を立てないで下さい」

「いやいや。絶対泣かせるぞお。冒険者だって、いろんな所をふらふらするわけだし。つまり、それだけ出会いがあるわけだからな。

特にお前は、腕っ節は弱そうだけど、見た目は悪くないっていうか・・・絶対、各所で女の子をひっかけていくタイプだな」

「人聞きが悪いですよ」

そこで急に、男の目が細くなった。

「よく考えたら、そういうタイプの男が一番迷惑なんだよなあ。うるちよろしないで一カ所に留まってくれればいいんだけど・・・でも、お前は伝説になってしまいうわけだから、そんなわけにもいかないだろうし」

何か言い返そうとしたが、なにやら雲行きが怪しかったので、黙り込む。

男の横目には明らかかな敵意が込められていた。

「そうか。そうだよなあ。将来伝説になるとはいえ、今はまだひよっこなわけだ。ここでさくつと処分しておくって手もあるよな。いや、それどころか、ここで俺が倒せば、もしかして、俺が伝説の男って事に・・・」

「いえ、ならないです・・・よ、ね？」

最後の方は声にならなかった。男がすつとこちらを向いたからである。

もの凄い目をした男に睨まれる格好になった。

まだ平原の手前の山奥。

逃げたら逃げたで、気温や獣といった敵がいる。食料もほとんど

ない。

どうしよう。

だが、不意に男の表情が緩んだ。  
助かった。

レオンの正直な感想はそれだった。

男がまた前を向きながら言う。

「まあ、そういう事だから」

急な言葉に、レオンは戸惑う。

「何がですか？」

「不用意に女に手を出すのはまずいつて事。変なところで恨みをかたりするからさ。だから、気をつけた方がいい。為になった？」

「・・・はい」

気をつけるもなにも、そんなつもりはさらさらないわけだから、はつきり言つて余計なお世話だったが、口には出来るなかった。

少なくとも、さっきの眼差しを忘れるまでは。

何事もなかったかのような口調で、御者の男は口を開く。

「しっかし、天気いいなあ。これだと、明日の朝には着けそうだ。

お前もそのつもりで準備しとけよ」

「あ、はい。分かりました」

男は機嫌良さそうに口笛を吹き始める。全く聞いた事のない、レオンの速い曲だった。

レオンはなんとなく、眼下に広がる平原を見つめる。

下っていく山道も、徐々に雪が減りつつある。標高が下がってきた証拠かもしれない。ずっと山奥で育ってきたレオンにとって、初めての下山。不安もあるが、やはり期待の方が大きい。御者の彼が言うように、多くの人との出会いがあるだろう。最初に会った彼から得た、記念すべき最初の教訓は、多少残念な内容だったけれど。でも、面白い。

レオンは微笑む。きっとこれからもそうだ。きっと楽しい事がた

くさんあるはず。

この先の平原。春の草原の中にある小さな町。ユースアイには、その姿も徐々に近づいてくる。

風も次第に暖かくなる。

春。

旅立ち。

雪の下から新芽が顔を出す。そんな季節だった。

## 導きの妖精

毛の長いマフラーを引きずったヒヨコが、頭の上を右往左往している。

簡単に表現するなら、そんな感じだった。

レオンは自治都市ユースアイのギルド事務所にいた。正確には、冒険者ギルド・アンリミテッドのユースアイ支部事務局。だけど、この町まで連れてきて御者の人も、ここに来る途中で道を尋ねた人も、皆がここを、単にギルド事務所と呼んでいた。それどころか、目の前に座っている受付のお姉さんでさえ、正式名称では呼ばなかった。レオンが正式名称を知ったのは、この入り口に書いてあるのを読んだからだが、それも掠れてしまっていて、かなり読みにくかった。

入った途端にいかつい男達に睨まれる。そんなシチュエーションを予想していたのだが、聞いていた通り、人は少なかった。それでも、ぴりぴりした雰囲気の方が数人ベンチに腰掛けていたので、レオンは少し緊張した。

それでも、何事もなく窓口まで行き、冒険者見習いとして登録したい旨を説明すると、あっけなく手続きが始まった。田舎者のレオンにとって、こういう手続きは初めてなので、何か失敗しないか心配だったが、とりあえず、最初は上手くいったようでほっとした。

その矢先に、頭に飛び乗ってきたのが、この生物だった。

「……あの、すみません」

おずおずと聞くと、受付の女性がこちらを見上げる。自分より年上のお姉さんで、理的で落ち着いた雰囲気の人である。彼女はレオンの書類を作ってくれているらしく、椅子に腰掛けたままだった。

「はい。何か？」

ブラウンの瞳には、こちらをからかっている色は見えない。だが、

レオンの今の状態に気付いていないわけがない。

やや躊躇したものの、聞かないわけにはいかなかった。

「この、頭の上をうるちよろしてるのは……」

当然の質問だと思ったのだが、受付の人はきよとんとした顔で聞き返してきた。

「カーバンクルですけど……」

「いえ、それは僕にも分かります」

それくらいはレオンも知っていた。色違いだが、村に一匹だけいたからである。

「そうじゃなくてですね……なんで、僕の頭の上をうるちよろしてるんですか？」

受付のお姉さんは、ようやく理解したという顔になる。

「あ、すみません。最近だと、みなさん既にご存じの場合が多いので、説明を省略させて頂いていたんです」

はあそうなんですかと、レオンは生返事を返す。つまり、知らなかった自分の方が珍しいという事のようにだ。

「そのカーバンクルは、そうやって貴方の前世を見ているんです。もちろん全部は見られませんが、一部を読みとる事が出来ます。それを私に伝えて貰って、今度は私がギルドのレコードを調べます。そうすれば、貴方のおおよその適性が分かるんですよ」

そんな事が出来るとは初耳だった。村にいたカーバンクルは、ただのペット同然で、ほとんど役には立っていなかったからである。

「カーバンクルって、そんな事が出来るんですか？」

「あ、でも、それはギルドに住み着いている子だけです。他の場所にいる子には出来ないみたいですね。特技とか芸みたいなものじゃないかとか、そういう役目として居着いているんじゃないかとか、諸説あるみたいですけど……」

「へえ……」

そこで、レオンの頭の上にいたカーバンクルが、受付の女性の方に飛び移った。反動のようなものはほとんど感じない。感じたのは、

ふさふさの毛の感覚だけだった。

藍色の瞳が一瞬だけこちらを向くと、そのまま受付の女性の頭の上って、そこでまたくるくと堂々巡りを始めた。

それを全く気にかける様子もなく、受付の女性は微笑んで、右手を部屋の奥に向けた。

「もうしばらくかかりますので、そちらにおかけになってお待ち下さい」

レオンは軽く頭を下げたから、示されたベンチに腰掛けた。入った時にそこにいた男達は、もういなかった。

他に見るものもないので、レオンは、女性の頭の上をくるくる回っているライトイエローの生物をなんとなく眺めていた。女性は気にする素振りもなく、書類作りに精を出しているようだ。

カーバンクル。別名、導きの妖精。

見た目で一番近いのは、キツネやイタチかもしれない。同じ4足歩行の生物。それを子供サイズに縮小して、体毛を長くふさふさにした生物というのが、だいたいの外見である。

だが、その実態の多くは謎に包まれている。

例えば、体重が非常に軽い事。体毛や瞳の色が様々な事。群を作らない事などが挙げられる。

だが、最大の不思議は、この生物には死というものがないという事実である。

カーバンクルには寿命がない。少なくとも、自然死した個体は知られていない。さらに、カーバンクルは食事出来るが、しなくても生きていける。食べても排泄はしない。眠る事もするのだが、それが必要なのは不明。呼吸が必要なのかすらもはっきりしない。水中を普通に歩く個体もいるという噂だった。もっと言えば、どうやって数を増やしているのかも、まるで分からない。オスとメスがあるのかすらも分かっていないのだ。

今までにいろいろな学者が調べたが、まるで何も分かっていない。捕らえようにも、いつの間にか逃げてしまう。だから、大昔にもう

諦めてしまったというのが、レオンの村の長老の話だった。

まさに不思議生物なのだが、大昔の人達の間でも、そもそも生物となのかという話にはなつたらしい。

そこで、とりあえずのカテゴリーとして、カーバンクルは妖精という事になっている。他に妖精と分類されているものはないから、専用枠である。それだけ特殊な種なのだ。

そういうのはつきりしない存在なのだが、人を襲うわけでもないし、作物を荒らす事もない。気ままだが、大人しいし、鳴いたり暴れたりするわけでもない。特別な世話も必要ないし、懐いた人間なら言うことも聞く。そして何より、見た目が愛らしい。

そういうわけで、レオンの村ではペット以外の何者でもなかった。何か特殊能力があったわけではないが、見た目で少し癒される。見かけたら撫でてやって、何か食べ物でも与えてみる。それを食べる姿にまた癒される。はつきり言つて、かなり良いご身分である。だけど、まあそれくらいはいいかなと思わせるくらいの愛らしさがあった。

だけど、ここのカーバンクルは立派に仕事をこなしているようだ。能力の理屈は不明だし、見た目には、人の頭の上をくるくる回っているだけなのだが、このギルドの一翼を担っているらしい。思ったより多才だった事に、レオンは驚きだった。

やがて、仕事が済んだのか、ぐるぐるしていたカーバンクルは不意に足を止めて、そのまま女性の頭の上で丸くなった。色合いもあって、金の王冠みたいに見える。

妖精は目を閉じていた。まさか、そこで休憩するつもりだろうか。その数秒後、女性は書類を持って立ち上がった。まったく頭上を気にする様子はないが、カーバンクルの方もバランス感覚がいいのか、張り付いたように動かなかった。

そのまま、女性はカウンターの奥の扉の向こうに消えた。

見るものがなくなってしまったので、仕方なく、事務所の中を見回してみる。

木で出来た建物。このベンチも、カウンターも椅子も、全部同じ木材を使っているようだ。照明はあまり多くないが、それでも十分なだろう。あまり広くはない部屋に、事務員らしき女性が1人。レオンの母親くらいの年齢だろうか。その女性も、さっきの受付の人も、全く同じ服を着ている。ギルドの制服なのだろうか。黒が基調で、なんだが格好いい。そういう服を着ている人は、もちろんレオンの村にはいない。御者の人は小さい町だと言っていたが、レオンにしてみたら、十分都会である。

ここから始まる。

不意に頭を過ぎったその言葉に、レオンは急に気分が高揚してきた。緊張していたためだろうか、今まで忘れてしまっていたワクワク感が戻ってきたのである。

新しい世界。その始まりの場所。思ったより、劇的な事はなかったが、田舎者の自分にはこれくらいがちょうどいい。あまり刺激が強すぎても困る。

ここから頑張って、何とか一人前の冒険者になる。とりあえずはそれが目標だが、そこまでの道のりを想像するだけでも、レオンは楽しみで仕方なかった。

新しい出会いがあつて、新しい事を知って、新しい自分を見つける。

そこでレオンは、ふと気付いた事があつた。

自分の前世を見たい。それがこの旅立ちの目的のひとつでもある。だが、さっきの受付の女性は、あのカーバンクルが自分の前世を読みとつてくれると言っていた。そして、詳しく調べるとも言っていた。

もしかして、それではつきりするのだろうか。

はつきりしてしまうのだろうか。

もしここで分かってしまったらと思うと、レオンの胸中は複雑だった。目的が達成されるのだから、もちろん悪いわけではない。だからといって、こんなにあっさり分かってしまうと、自分の悩みはな



んだったのかと思えてしまう。

どちらがいいんだろう。

聞きたいような、聞きたくないような。

レオンの予定では、自分の前世が分かるのは、見習い冒険者卒業の時だった。

一人前の冒険者として認められるには、魂の試練場というダンジョンを攻略しなければならぬ。その最奥で、その冒険者はカーバンクルと出会うと言われている。そのカーバンクルが、自分の魂の場所まで案内してくれると言われているのだ。

その魂の名前がアーツ。

前世の自分が、来世の自分の為に残した遺産。それを手に入れる事が、冒険者の証。

それを手に入れたら、自分の前世の事が分かる。

そんな予定を立てていたのだけれど。

「レオンさん」

不意に名前を呼ばれて我に返ると、いつの間にか、受付の女性が戻ってきていた。頭の上の妖精もそのままである。本当に装飾品みたいだった。

レオンは慌てて立ち上がって、窓口に向かう。

ここで分かっても、まあ、それはそれでいいじゃないか。懸念がひとつ解消されたと思えばいい。どちらにしたって、冒険者を目指すのは一緒なんだから。

だが、どうやらそんな話ではなかったようだ。受付の女性の表情は、傍目にも分かるくらい困惑顔だったのである。

「あの・・・申し訳ないんですけど、該当するレコードが見つからなかったんです」

レコードというのはよく知らないが、要は、自分の前世がよく分からなかったという意味だろう。

嬉しいような、残念なような、入り交じったような表情で、レオンは頷いた。

「そうですねか・・・あの、やっぱり、珍しい事なんですか？」

女性は控えめに頷く。少し揺れたはずだが、頭上のカーバンクルに起きる気配はない。

「ええ、まあ・・・それで、出来たら、レオンさん自身が見た前世の記憶を教えてくださいませんか？そこからまた探してみますので」「記憶ですか」

レオンは苦笑した。ないものは教えようがない。

「あの・・・？」

「あ、いえ、実はですね・・・あの、驚かないで下さいね」

「驚くような前世なんですか！？」

何か期待するような響きが含まれていた気がしたが、それは必死に無視した。

「実は、僕、前世の記憶がないんです。今まで全く、夢を見た事がなくて・・・」

レオンはなるべく驚かせないようにゆっくりと言ったのだが、無駄だったようだ。

思いつきり気まずい静寂。

受付の女性は完全に固まっているし、奥で事務をしている人も、手が止まっていた。

他に誰もいなかったのが、救いといえば救いだっただ。

カーバンクルだけが呑気に眠っている。

どうしようかと困り果てたところで、受付の女性が絞り出すように言った。

「・・・あの、冗談ではないですよね？」

レオンは慌てて手を振る。そう思われるのが一番困る。

「いえいえ！そんな、冗談なんて・・・」

それを見て、受付の女性は額に手を当てた。何やら難しい顔をしていた。

「・・・もしかして、何か問題があったりしますか？」

もしかしたら追い返されるかもしれないという懸念が、再び顔を

見せ始める。

しばらく間があつてから、女性はこちらを向いた。

「えつとですね。ギルドに加盟する事は可能です。それ自体には、特に資格というものは必要ありませんので。ただ、前世が分からないというのは、レオンさんにとって不利になります。適性が分からないという事になりますから、何でも手探りという事になります。ですが、あの、もちろん、ご存じだと思いますが・・・」

そこで女性は間を取った。レオンもなんとなく姿勢を正した。ここからが、特に重要な話なのだ。

「冒険者は戦闘に重きを置きます。最初はある程度の安全を確保してありますが、基本的には命がけです。ですから、手探りと口で言うのは簡単ですが、その手探りにも命の危険が付きまといまます。人より苦勞するのはもちろんですが、冒険者の場合は、苦勞だけで済まない事もあるんです。あと・・・これは申し上げにくいんですけど、レオンさんが仲間を探されるときに、恐らく障害になると思われます。他の皆さんも命がけです。冷たいようですが、適性を十分に生かせていないレオンさんを受け入れる人は少ないと思うんです」

正直、シヨツクな話だった。

こんなに自分にハンデがあるとは思っていなかった。自分だけで済むならともかく、仲間が見つからない可能性まであるのだ。

そうなつたら、ずっと1人で戦うのだろうか。

それは無理だろう。何より、辛いだろう。だけど。

レオンは微笑んだ。

「大丈夫です」

女性の瞳が少し大きくなる。

「心配してくれてありがとございます。でも、とりあえず、やってみようと思うんです。あまり強くなれないかもしれないし、仲間も出来ないかもしれないけれど・・・でも、やってみないと分からないですから。とにかくやってみます。それでもダメだったら、村

に帰るなり、他の仕事を見つけるなりします。それくらいの決断は出来るつもりです。だから、挑戦だけはさせてくれませんか？」

「しばらく1人のままかもしれません。1人はつらいと思います。無理して冒険者にならなくてもいいんですよ？」

「1人じゃないですよ。ここまで乗せてきてくれた行商の人が言っていました。この町は良い人ばかりだつて。だから、なんとかありません。ギルドの受付のお姉さんも、すごく優しい人ですし」

女性の真摯な瞳としばらく見つめ合った。

だが、やがてふつと微笑んでくれた。

「分かりました。では、ギルドとして正式にサポートさせて頂きます。何か分からない事がありましたら、何でも聞いて下さい」

「はい。これからよろしくお願いします」

レオンが頭を下げると、女性も少し笑って頭を下げる。

「よろしくお願いします」

その揺れには耐えられなかったのか、黄色のカーバンクルが頭からカウンターに滑り落ちてきた。

だが、目覚める気配はなかった。

気持ちよさそうに眠っている。

レオンと女性は、それを見て笑った。

「お疲れみたいです」

「そうですね。レオンさんの前世がなかなか見えなくて、大変だったみたいです」

「・・・すみません。起きたら代わりに謝っておいて下さい」

「それでしたら、今どうぞ。撫でてやると喜びますから」

レオンは少し意表を突かれたが、すぐに撫でてみた。

村のカーバンクルとは色が違ってても、手触りはほとんど同じだった。ふかふかでふわふわ。いつまでも触っていたくなる。

「・・・あの、名前はなんて言うんですか？」

「私ですか？」

その言葉に、レオンは気付いた。

「あ・・・そういえば、聞いてませんでしたね」

「聞きたかったんですか？」

女性は悪戯っぽく笑う。なんとというか、年上の余裕みたいなものを感じた。

少しどきどきしたが、そこで蘇ってきたのは御者の言葉だった。

妙なトラブルは遠慮したい。

「あ、いえ、すみません、その・・・聞かなくても、大丈夫ですよ  
ね」

戸惑ったように言うと、それが可笑しかったのか、女性は吹き出した。

「すみません。そんなに困るとは思わなかったの・・・」

「そ、そうですね。こちらこそ・・・」

「ケイトと呼んで下さい」

そう名乗ってケイトは微笑んだ。理知的で落ち着いた、ブラウンの髪と瞳の女性。恐らく20歳前後だろう。格好いい制服と、まとまったヘアスタイルのせいで大人っぽく見えるだけかもしれないけれど、少なくともレオンより年下という事はない。

「あと、この子はシニアです。もちろん、私が名付けたわけじゃないですけどね。だけど、このギルドで一番の年上なのは間違いないです」

「ということは、もしかして、町が出来てからずっといるんですか？」

「はい。少なくとも、もう400歳以上」

「へえ・・・」

どういうわけか、カーバンクルは一カ所に居着く事が多いらしい。人から聞いた話だったが、ここの妖精も、その例に漏れないようだ。その最長老の大御所も、今は愛らしい姿で寝息をたてていた。

## マスター・ガレット

ユースアイはのどかな町だった。

きっと住みやすく豊かなのだろう。少なくとも、レオンのいた村とは比べものにならないほど過ごしやすい。この時期、村はまだ雪解けしている頃だが、ここは完全に春の装いである。町の周囲は綺麗な緑一色だったし、空気もまったく冷たくない。山を下つてきたとはいえ、ここもそこそこの標高があるはずだが、それでもこんなに違いがあるのかとレオンには驚きだった。

町の中は思ったほどうるさくはないが、もちろん、村よりも圧倒的に人が多い。そもそも、町の大きさが違うのだ。村何個分だろうかと思えるくらいの広さがある。大通りには石畳が敷いてあって、石造りの建物もある。どちらも、村にはなかった物だった。そもそも、道なんて概念がない場所だったのだ。

そんなわけで、田舎者のレオンだと、道に迷う可能性が十分にあり。闇雲に歩いたら、確実に迷子になる自信があった。ギルド窓口のケイトさんに、大通り沿いにありますと説明されていたので、とりあえず石畳の上から出ないようにしているが、それでも不安なので、度々道を尋ねた。結局、歩いて10分くらいですと言われた場所にたどり着くまでに、30分はかかっただろう。もともと、あまりの物珍しさに、思わず商店などを眺めたりしていたので、それで余計に時間をとられたのもあっただろうけれど。

それでもなんとか、目的の場所にたどり着いた。まだ日は高い。もしかしたら、日が暮れるまで迷う羽目になるかもしれないと覚悟していたが、なんとかなったようだ。

レオンが立っているのは、木製の巨大な両開きのドアの前。

看板には、ガレットの酒場の文字。

見上げると、本当に巨大な建物だった。レオンにしてみれば、この町の建物はどれも十分に立派な物ばかりだったけれど、この建物は立派を通り越して、否応なく威圧感が感じられる。恐らく、木造3階建て。もしかしたら、4階があるのかもしれないが、レオンにとっては大差ない違いだった。幅も奥行きも、もの凄く広い。凄い物だという感想はもちろんあったが、どちらかというと、倒れてきそうで怖いなという思いが強かった。いったいどうやって、こんな巨大な物を支えているのだろうか。

何はともあれ、自分はここでお世話になるんだ。

レオンは深呼吸した。

やっぱり、少し緊張する。

そう思った時だった。

「じゃあ、ちよっくら行ってきまーす」

扉越しに、女の子の声が聞こえた。活発そうな、明るい口調だった。

それに答えたのは、対照的に、低くて、野太い声だった。

「しっかりと息の根を止めてこい！」

もの凄く物騒な発言だったが、声に似合い過ぎていた。

「分かってるって。というか、今日も来るわけ？」

「俺の勤がそう言ってる。新米はこの時期になると、懲りもせず次から次へとやってくるって、相場は決まってる」

「そっかー。まあ、そうかもね」

「だから、ここできつちり処分しておかねえと面倒な事になる」

「でもさー、ケイトさんからの依頼を待った方がよくない？」

「あんなもん待ってられるか！とっとうと行って、さくつと仕留めて来い！それがめえの仕事だろうが！」

「はいはい。じゃあ、まあ、出会い頭にぶすつとやってくるよー」

そこで扉が開かれようとしていた。

レオンはどうしようか迷った。

新米って、自分みたいな冒険者見習いの事だろうか。

その息の根を止める。処分する。さくつと仕留める。  
何でだろうか。

ケイトさんからの依頼とか言っていたけど。

その理由は分からない。分からないけれど、もしかして大ピンチ  
だろうか。

逃げようかとも思ったが、扉が開かれるまで一瞬だったため、そ  
んな暇はなかった。

扉の正面にレオンは立っていたため、必然的に、出てきた人物と  
目があった。

彼女もまた、ブラウンの瞳をしていた。年の頃は、たぶんレオン  
と同じ10代半ばくらい。利発そうな顔立ちに、栗色の髪を高い位  
置で縛ったヘアスタイルが相まって、より活発そうな印象が際だっ  
ている。

扉越しに聞こえた声は彼女のものだろう。だけど、顔立ちはとも  
かく、あまり荒事が出来るようには見えなかった。一般的な少女の  
どちらかという華奢な体つき。しかも、厚手の淡いピンクの服の  
上に、白いエプロンを着けている。すごく平和的な格好だ。

それでも、出会い頭にぶすつとされないか、一応警戒してしまっ  
た。

「あ、もしかして、見習い冒険者の人？」

少女がさばさばとした感じで聞く。

ここではないと言ったら、今度こそ刺されるのだろうか。

だが、レオンが返事をする前に、少女がすたすたとこちらに歩み  
寄って来て、あっという間に腕を掴んできた。

「え？あ、いや、その・・・」

慌てるレオンに、少女は笑いかける。屈託のない笑みだった。

「まあ、いいからいいから。お父さんに挨拶するんでしょ？」

「お父さんって？」

「いいからいいから。とにかく、入った入った」

楽しそうにそう言いながら、少女はレオンを店内に引っ張り込ん



だ。

店内は想像通り、もの凄く広かった。

中央の奥にカウンターがあり、その両脇には上り階段がある。そして、それ以外の場所には、丸いテーブルとイスが山ほど置いてあった。こんな大規模な建物の中に入るのは、もちろん初めてである。床も壁も木製で、特に光沢があるわけではないのだが、不思議と輝いて見えた。照明がたくさんあるせいだろうか。その照明も、見上げるくらい高い位置にある。

物珍しさに店内をキョロキョロ観察しているレオンを、少女はぐいぐいとカウンターまで引っ張っていく。屋内には食欲をそそるいい匂いが漂っていた。

店内のテーブルには空席が多いが、それはまだ昼間だからだろうか。それでも、こんな時間から酒を飲んでいるお客が10人ほどいた。そして、その全員が強面で、体つきがいい。間違いなく荒事をしている人達だろう。

つまり、冒険者達。

彼らと同じ場所にいる。その事実嬉しくなったが、目が合うと睨み返されたような気がしたので、じろじろ見るのは控えた。

10秒余りの道のりで、カウンターまでたどり着く。その辺りは、つんとした匂いが漂っていた。お酒の匂いだろうか。

そこにいる人物を見て、レオンは驚く。

なんというか、本当に想像通りの人物だったのだ。ギルドでは肩すかしたのだが、時間差でついに巡り会ってしまった。特に会いたかったわけではないけれど、意味もなく感動した。

カウンターにいた男は、少女と言葉を交わす事なく、いきなりレオンに質問した。

「見習いか？」

「あ、はい・・・あの、ガレットさんですよね？」

男は値踏みするようにレオンを見てから、少女の方を向いた。

「おい。お前はとつと仕事してこい」

「なんでー？こつちの方が面白そう」

「見せ物じゃねえんだ。いいから、さっさと終わらせてこい」

「しつかないなあ。まあ、また後で会えるからいつかなー」

少女は諦めたようにそう言うと、不意にレオンの肩を叩く。

レオンがそちらを向くと、少女は不敵な笑みを浮かべた。

「頑張つてね。うちのお父さん、この町で最強だから」

「最強？」

「じゃあね。また後で」

そう言つてウインクすると、軽やかな足取りで店から出ていった。何を頑張るんだらうとレオンは首を捻つたが、よく分からなかった。とりあえず、刺されなくて済んだ事が、よかつたといえればよかつた。

「名前は？」

唐突に問われて、レオンはまたカウンターの男に視線を戻す。

「あ、すみませんでした。レオンです」

男は腕を組んだ。それだけで、剥き出しになった二の腕に相当な大きさの力瘤が出来た。

まさに想像通りである。

カウンター内に立っている目の前のこの男こそ、レオンがおぼろげに想像していた人物そのものだった。冒険者に志願した自分を出迎えるのは、きつとこういう人物だらうと思つていたのである。

浅黒い肌に逞しい体つき。厳めしくて、彫りの深い面構え。頼りになる人物というののもちろんだが、見習い冒険者を指導する立場の人物としても、申し分ない容姿だった。具体的には、それだけの威厳と威圧感が間違いなく備わっている。そして、腕っ節もあるに違いない。少なくとも、腕相撲では絶対に勝てないし、腕を折られたとしても不思議はなかつた。

まだ名乗つて貰つていないが、彼が恐らく、この酒場の主人のガレットだらう。

「レオン。お前、ギルドに行ったか？」

「はい。それで、ここに挨拶してくるようになんて……」  
「そうか」

男はレオンの言葉を遮ってそう言った。

こちらをじっと見つめてくる。見つめるというのは穏やかな表現で、レオンにしてみれば、睨まれている感じだった。

「1年だ」

突然、男はそう言った。

「はい？」

「1年だけは面倒みてやる。だが、それで駄目なら諦める。これが約束出来るか？」

レオンは自分に問いかけてみた。

周囲からは静かな話し声が聞こえてくる。誰もこちらを気にしている様子はない。それも当然だと言えるだろう。自分はまだ見習い以下の、とるに足りない存在。

レオンの答えは一つだった。

「あの……1年もお世話になっていいんですか？」

こんな自分を1年も面倒をみてくれるなんて、こんなに有り難い話はない。

男の太い眉がぴくりと動く。

だが、次の瞬間、にやりと笑った。男臭い、だけど、さっぱりして印象のいい笑みだ。

「ガレットだ。寝床と飯は俺に任せろ。特に、お前の身体はまだまだ成長の余地がある。もっと食わせてやるから覚悟しろ」

「食わせてって……そこまでして貰っていいんですか？」

そう聞くと、ガレットは笑った。

「謙虚な奴だな！いいから食え！とにかく食え！ちゃんとギルドから金を貰ってるから、そんな事は心配いらねえ。お前が立派な冒険者になって、そこで儲けて金を返せばいいんだよ」

「あ、なるほど……」

レオンは頷いた。そういう仕組みだとは知らなかった。

「お前、何も知らないんだな。最近は、妙な知識ばかりつけた連中が多いから、それが当然ってふんぞり返ってる奴がいるんだ。そういう奴を見極めて、腐った奴を半殺しにするのが俺の仕事だ」  
「半殺しって・・・」

店に入る前の、物騒な会話が頭を過ぎる。

「そういうわけだったんだが、俺はもう決めた。お前は面倒みてやる！1年間、せいぜい頑張ってみろ！」

そう言って、愉快そうに笑いながら肩を叩いてきた。床が抜けるんじゃないかと思うくらいの衝撃で、きつと骨が少し歪んだだろう。だが、半殺しに遭うよりは何倍もいい。

「これからよろしくお願いします」

頭を下げるレオンを見て、ガレットはまた笑った。そして、自分がイスに腰掛けると、レオンにも座るように言った。

レオンも近くのイスに座った。

「俺も昔は冒険者だったんだ」  
ガレットはそう切り出した。

「お前のような見習いの時期も当然あった。だから、多少はアドバイス出来る。ただ、専門的な事は難しいが・・・レオン、お前はジニアスか？」

「いえ、一応アスリートの方を」

前世云々の話は、出来たら避けたいところだった。

ガレットはレオンの身体を一瞬だけ眺める。

「そうか・・・しかし、お前だと重い鎧は無理かもしれねえな。武器屋には行ってみたか？」

「いえ、まだ全然」

「そうか。なら、まだ日が高いうちに行ってこい。鎧の仕立てには時間がかかるから、一日でも早い方がいい」

「分かりました」

「時間があったら、道具屋と、あと伝承者にも会ってこい」

「伝承者？」

「それも知らねえのか・・・くそ、肝心な時に、あの馬鹿娘はいねえしな」

馬鹿娘というのは、恐らくさつきまでいたエプロン姿の少女だろう。今はどこかに行っているが、それは目の前の父親が追い払ったからである。だが、それを堂々と指摘する度胸はない。

「まあ、あの馬鹿に期待しても仕方ねえな。とりあえず、今日するべき事は分かったな？」

「はい。場所が分からないですけど」

「それは教えてやる。だが、その前に・・・」

急にガレットはイスから立ち上がって、そのままカウンター奥のドアを開けて、その中に入ってしまった。

調理場だろうか。開けた瞬間に、いい匂いが漂ってきたので、なんとなくそう思った。

そういえば、まだ昼食を食べていなかった。

お腹が減った。そう思った瞬間だった。

ガレットがドアの向こうから姿を現す。だが、レオンの目が釘付けになったのは、彼が持っている物だった。

羊肉だろうか。その巨大なステーキ。

こんな肉の塊を見るのは、お祭り以外では初めてだった。

ガレットはその肉が盛られた器を、レオンの前に置いた。

「とりあえず、今日はこれくらいで勘弁してやる」

レオンはそれをまじまじと見つめてから、急に居ても立ってもいられなくなってきた。

「いえ、あの・・・こ、こんなに!？」

ガレットは可笑しそうに言う。

「食べねえってのか?これくらい食わねえと、体力つかねえぞ」

「いえ、そうじゃなくて・・・」

「何だ?男だったら、はつきり言ってみろ」

「こ・・・これ、凄く高価なものなんじゃ?」

レオンにしてみれば、当然の疑問だった。

こんな豪華な食事を食べる事なんて、村では滅多にない事なのだ。それこそ、一年に一度の祭りくらい。量もそうだが、この金銭感覚のギャップに、戸惑わざるを得ない。

だが、しばらくの沈黙の後、ガレットは大笑いした。

「気にするな！とにかく食べ！食って食って食いまくれ！そうしねえと、ここ一番って時に力が出ねえぞ！」

そう言われても、なかなか踏ん切りがつけられないものではない。

「さっきも言っただろ？ギルドから金が出るんだ。つまり、お前の先輩達が出した金だ。その先輩達も、見習いの頃はギルドの金で飯を食ったんだ。俺だってそうだ。お前は俺が出した飯を食って、それを血と肉にして、次の奴らの為に金を稼げばいいんだよ」

正直、まだ迷っていた。レオンの村はあまり裕福とは言えないからである。

だけど、これが通るべき道なんだ。

レオンは肉を切って、口に入れた。

歯ごたえがあって、肉汁が口の中に広がる。

「美味しい……美味しいですね！」

控えめに口にしたが、実際には想像以上の味に感動して泣きそうだった。

次々と口の中に放り込む。その勢いは全く衰えない。

ガレットはイスに座って、そんなレオンを眺めていた。相変わらずの厳めしい顔の中にも、どこか優しいものが含まれていた。

「そうだな……夏までに体重を、今の半分増やせ」

その言葉に、レオンは吹き出しそうになった。

「半分！？半分って……ぶくぶくになりますよ」

「誰が肥えろって言ったんだ？食って、鍛えて、筋肉にするんだよ。いいか？夏までだ！そうしねえと、一年で魂の試練場を攻略するなんて絶対出来ねえ。とにかく、必要なのは身体だ！鍛えて鍛えて鍛えまくれ！」

そこで、店のドアが開いた。

聞こえてきたのは、先ほどの少女の声だった。

「あつれー？まだ生きてたの？」

いきなりの発言に、レオンはむせた。

「お前、仕事は？」

ガレットの声が少し低い。その目の前にいるレオンは、ステーキを頬張りながらも若干不安になった。

レオンは振り返ってみた。

少女は父親の威圧感をものともせず、すたすたとこちらに歩いてくる。

「途中でホレスに会ったから、任せてきちゃった。別にいいでしょ？」

「あいつか？なんで町にいるんだ？」

「知らないけど、別にいいじゃん、どこにいたって。それよりも・  
・彼、ご飯食べてるって事は、合格なの？」

「何か悪いか？」

「悪くないけど・・・へえー」

少女がこちらの顔をまじまじと見つめてくる。やや切れ目だが、大きな瞳。あまりに遠慮のない視線に、レオンは少したじろいだ。

「おつかしいなあ・・・ちょうどぼっこぼこにされてる頃だと思っ  
て、楽しみにしてたのに」

「楽しみって・・・」

そんな事楽しまないで欲しいと、レオンは心底思った。

少女はガレットに視線を戻す。

「何がよかったの？なんか、私の方が強そうだけど」

「ずばずば言うなあと思ったが、どちらが強いかはともかく、自分が弱そうに見えるのは確かである。それに、実際に喧嘩する事になったら、自分は女の子を殴れないだろうから、そういう意味では間違いないと言えない。」

「ギルドが許可したんだったら、そもそも俺がどうこう言える立場じゃねえんだよ。合格も不合格もねえ」

そうなのかと思ったが、案の定、少女はすぐに反論した。

「うっそだー。今まで何人も追いつ返したくせに。ギルドが断った人よりも、お父さんが追いつ返した人の方が、絶対多い」

「俺が追いつ返すような奴は、どうにもならねえ奴らばかりなんだよ。そういう奴をギルドで追いつ返したりしたら、変に逆恨みする馬鹿もいるから、一旦許可してこっちまで連れてこいつて言っただけだ。そこで俺が綺麗さっぱり諦めさせてやる。断りの代理をしてるだけなんだよ」

「お父さんだって、逆恨みされたら困るでしょ？」

「俺に逆恨みする度胸があるなら、いいじゃねえか。その時は面倒みてやる」

「私とかお母さんとかを狙ってきたらどうしてくれるの？」

「いい度胸だ。そんな奴はどうしようもねえから、きっちり止めを刺してやれ」

「私の身は可愛くないのかー？」

「可愛いだあ？普通の娘だったらまだ分かるけどな」

「私、普通の娘！」

「誰が普通なんだよ。普通の娘は、親父の殴り合いを見て喜んだりしねえだろうが」

「むう。でも、血を分けた娘なんだから、普通は少し心配になるものでしょ？」

「心配したなあ。昔は」

「普通は今も心配でしょ！私、年頃の娘なんだけど！」

「年頃は年頃でも、お前は棘があり過ぎるんだよ！お前に手を出そうなんて命知らずな男がいるわけねえだろうが！」

「それはお父さんのせいだつて！俺を倒せる男じゃないと嫁にやらんとか、そんな恥ずかしい事を堂々と言われたら、誰だつてちよつと引くに決まってるでしょ！」

「それだけじゃねえだろうが！お前が今まで何人の男を返り討ちにしたと思っただけだ！そんな女に誰が近寄ろうとすんだよ！」



「下心丸出しの奴だったら、身を守って当然でしょ！」

「それらしい守り方があるだろうが！普通の娘は実力行使に出たりしねえんだよ！」

「実力があるんだからいいでしょ！」

「まずそこが普通じゃねえんだよ！」

いい加減、レオンは口を挟む事にした。

「あの！」

凄いい形相の2人に睨まれて、レオンは思わず両手を挙げた。その両手にはナイフとフォークが握られたままである。

圧倒的な視線に負けそうになりながらも、レオンはなんとか進言した。

「・・・喧嘩はやめませんか？他のお客さんもいるし」

そう言っただけで周囲に視線を走らせてみるが、どういいうわけか、誰も気にした様子はなかった。

もしかして、いつもの事なのだろうか。

ガレットとその娘は、2人同時に大きく息を吐いて、そして、一瞬で口元に笑みを見せた。

「・・・そうね。今日はまあまあよかったかも」

「そうだな。悪くない」

レオンには、その言葉の意味が分からなかった。

「え？・・・あの、どういう意味ですか？」

2人は何食わぬ顔で言った。

「親子のコミュニケーションなの。たまにやるんだけど、今日は結構いい戦いだっただわ」

「ストレス発散でもある。なかなかスッキリするんでな」

レオンの身体に、どつと疲れが押し寄せた。

どこからか、その戦いだったのだろうか。気を揉んだ自分が馬鹿みたいである。

そこで、ガレットが思い出したように言った。

「ベティ。そいつが飯を食い終わったら、伝承者の所まで案内して

「やれ」

「デイジーのと」？」

「そうだな・・・それと、ニコルの所も」

「ニコルもー？大丈夫なの？」

「真面目な奴だから、大丈夫だろ」

「染まつちやつたら困るでしょ」

「いざとなったら、俺がどうにかする。とにかく、会わせてみる」

「はい。まあ、面白そうだからいいけどね」

なんて素直な返事なのだろうか。さっきの口喧嘩は本当に嘘みた  
いである。そういえば、店に入る前の会話も結構スムーズなものだ  
った。

そこでレオンは気付いた。

「あ・・・ベティさんっていうんですか？」

そちらを向いて聞くと、ベティは微笑んだ。栗色のポニーテール  
と瞳が印象的な、活発そうな少女。腕が立つようだが、それももし  
かしたら冗談なのかもしれない。

「そう。ベティ。その親父の娘で、ここでも働いてるからよろし  
くねー」

「あ、はい。僕はレオンです。よろしく」

「レオンはさあ・・・」

すぐに会話を始めようとするベティをガレットが止めた。

「先に飯を食わせてやれ。冷めちまうぞ」

「あ、そうだねー。さあ、とつとと食えー」

ベティが笑いながらレオンの背中を叩く。

その衝撃で食べ物が変な場所まで入ってしまった、レオンはしばらく  
咳が止まらなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6452y/>

---

夢色彩のカーバンクル

2011年11月22日02時00分発行